

滝尻の神子

安珍は、再び、小道を下り、滝尻王子へ向かった。

熊野の参詣道には、九十九の王子と呼ばれる社がある。

この王子を参拝し、熊野坐神に辿り着くのが、参詣の手順である。

特に、この滝尻王子は、熊野の神域の結界にあたる重要な王子だ。

入口の鳥居から本殿まで長い石畳の参道がある。

その参道を清姫が竹箒で掃いていた。

白の小袖に赤い袴を履き、髪を同じく赤い布で結び後ろに垂らしている・・・清潔感にあふれた神子の衣装だ。

安珍が来た事には、気付いているだろうに・・・

清姫は、安珍が近付いても、頭を上げようともせず、そしらぬ顔で掃除を続けている。

「『苦勞様だね。いつも、お努めをしているのかい?』」

安珍は、清姫に声をかける。

清姫が、答えようともしないので・・・清姫の手伝いをしていたハツが代わりに答えた。

「えー、そうですね。毎日、こうして滝尻様のお世話をされているんですの。」

そうか・・・と、安珍は合点をした・・・

神殿には、穢れのない乙女にしか、上がる事を許されない。

してみると・・・さつき、水の中で泳いでいたのは・・・ただ、遊んでいたのではなく神に奉仕する前の清めの儀式でもあったのだ・・・

庄司 清重は、この滝尻王子の神官を兼ねている。

清姫が、この滝尻王子の神子をするのは自然な成り行きであろう。

まるで、安珍の心を読んだように、ハツが続けた。

「そのために、水垢離はかせません。・・・まあ、姫様の場合、水遊びか何だか、わからないんですけどね。・・・けれど、姫様は、えらいんですの。冬の冷たい最中でも水の中に入られるんですから・・・」

安珍は、あらためて、清姫の方を見つめた。

こうして、参道を掃いている清姫は、きりりとして大人びて見える。

安珍は、社の前に歩をすすめ、そして、真言を唱え始めた。



滝尻王子